
秋風の真実

しんどうみずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋風の真実

【Nコード】

N4734I

【作者名】

しんどうみずき

【あらすじ】

姉ちゃんは21。

友人は18。

この二人が結婚するって……？

「おれは絶対に認めないからな！」

高校三年生のケイゴ　　秋島恵吾は、彼の姉に向かって指をつきつけた。

「どうしてよ」

ムスツとしたような顔で秋島律子がこたえる。今年で21歳になるリツコは先っぽでカールした髪を指に巻きつけながら、頬を膨らませていた。

「あいつはおれの同級生で、しかもまだ未成年なんだぞ！　学校すら卒業してないってのに、どうやって生活していく気だよ」

「この家があるもんね。お父さんもお母さんも、うちに住むのには賛成しているし。あんただって友達が来たら嬉しいでしょう？」

「んなわけあるか！」

ケイゴはまくしたてるように続けた。

「いいか、修学旅行やかだか数泊のお泊まり会とは違うんだぞ。この家で暮らして、同じ飯を食って、一緒の風呂を使うんだ。それのどこが嬉しいっていうんだよ。いくら幼馴染とはいえ、おれはそんなこと絶対に嫌だからな」

「わからずや」

皮肉るようなリツコの口調に、ケイゴは顔を真っ赤にしながら反撃する。

「この常識外れ！」

「バカ弟！」

「あんぽんたん！」

「時代遅れ！」

こうなるとただの兄弟げんかである。

罵り合いでケイゴが勝ったことは今まで一度もなかった。それは彼のボキヤブラリーが貧困なせいもあるし、リツコのほうが年上で

あることも大きかった。

やがて、しりとり終盤のような勢いになってしまった高校生のケイゴは、口をパクパクと動かしながら何も言えなくなってしまった。同じ言葉を繰り返すのは、すなわち敗北を意味する。

大学で文系の道を歩むリツコの勝ち誇ったような表情を見て、ケイゴは無性に腹が立った。

下の階まで響くくらい、大きな足音を立てながら、ケイゴは二階にある姉の部屋を乱暴に出て行った。

どうしたの、と両親が驚きながら声をかけたが、ケイゴが返事をすることはなかった。

顔も見ずに家を飛び出した息子を心配して、両親は不安げに顔を見合わせた。最近、すっかり親の伸長を抜かしてしまったケイゴ。両親ともども背が低いのだ。

体格の良いケイゴの背中は玄関の向こうへ消えた。

「どうしたのかしら……」

母親が声をひそめる。眉間にしわを寄せながら、父親は真剣な表情でテーブルの木目を見つめていた。

「ふうむ……」

そのとき、階段からリツコが姿を現した。

彼女の疲れた様子に、母親は思わず声を上ずらせる。

「あんた、もしかして」

「大丈夫だよ。まだ、あの子には言っていない」

ホツと胸をなでおろす。しかし、父親はいまだに浮かない顔をしていた。

「そろそろ潮時かもしれんな。ケイゴも子供じゃない」

「え、じゃあ……」

「リツコも結婚するんだ。もう早すぎるということはないだろう」

「そうだね。あたしもそう思う」リツコが同意する。

「……でも……」

渋る母親の肩に、父親が優しく手を置いた。そして、うなずいて

見せる。

「あいつは子供じゃない。けど、おれたちの子供だ。それだけは変わらないさ」

秋風が木の葉を巻き上げ、人のいない通りを滑って行く。雲のない空は夏よりも高く見えた。

上着も何も着てこなかったたので、手足の先が冷える。

両手に息を吹きかけながらケイゴは暖をとっていた。

「なんだっていうんだ　くそ」

足元に転がっていた石ころを思い切り蹴とばす。サッカーのフリキックのようにはうまくいかなくて、アスファルトの地面を静かに転がったあと、排水溝に吸い込まれていった。

また風が吹きすさぶ。

冷たい流れは、ケイゴの熱くなった耳をなでていった。

「……結婚なんて、ふざけてる」

リツコはまだ大学生なのだ。まあ、もう成人しているのだし、あまり個人的な問題について口を挟みたくはない。しかし、相手が気に入らなかった。

よりによつて、ケイゴの幼馴染である高嶺翔慈を選ぶことはないだろう。彼はまだケイゴと同じ18歳なのだ。自分が結婚する姿など、想像もできない。

二人が交際していたことすらも気がつかなかった。

徒歩で10分ほど離れたアパートで独り暮らしをしているシヨウジのもとへ、リツコが足繁く通っていたのは知っていた。だがそれは単にご飯を作りに行っていただけであり、親密な関係だったとは思ってもよらなかったのだ。

「……姉ちゃんも姉ちゃんだが、シヨウジもシヨウジだ」

ケイゴは誰もいない公園を見つけると、錆びたブランコに腰掛けた。古びたブランコは揺れるたびに隙間風のような甲高い音を立てた。

子供のころは、こつやつてシヨウジとよく遊んだものだ。それが、今は結婚だなんて。

「どうして、わざわざ苦勞するような道を選ぶかなあ……。ようやく元通りになりかけていたのに」

物心ついたときには、シヨウジと同じ幼稚園に通っていて、家も近かった二人はたちまち仲良くなった。すこし年上のリツコも小さいうちは一緒になって遊んでいたのだが、ケイゴが小学校に入るころには、もうリツコが加わることもなくなっていた。

ずっと友達でいような。

事態が急変したのは、木枯らしの吹く、乾いた冬の日のことだった。

けたたましく鳴り響くサイレンの音でケイゴが目を覚ますと、カーテンの向こうが朝日のように明るい。幼心に、いやな予感がした。乾燥した空気は燃え盛る火柱を助長し、消防隊が明け方になって鎮火するまでに、シヨウジ家を完全に焼きつくした。残ったのは、小学生の子供一人。両親はシヨウジを逃がし、灰の中で発見された。火事の原因は、高校生による気まぐれな放火。私生活でストレスがたまっていたのだという。

茫然と、ただ茫然と自分の家があった場所を、シヨウジは見つめていた。

煙のくすぶる空間に、彼はいつたい何を見ていたのだろうか。火事の中に思い出を忘れてきてしまったかのような、遮るものもなく冬風にさらされるシヨウジの背中に、ケイゴは何も言うことができなかった。

それからすぐ、シヨウジは親戚のもとへ引き取られた。

別れを告げることもなく、黒い車に乗せられるシヨウジを、ケイゴとリツコは家の窓から見送った。年賀状も、暑中見舞いも。シヨウジから連絡が来ることはなかった。

ケイゴに与えたシヨックは相当なものだったが、時間とともにいつしか悲しみは流れていく。

心の傷はやがて癒え、ふとした瞬間に彼の姿を思い出すこともなくなった。

そして、シヨウジは北風のように舞い戻って来た。

「久しぶり。ケイゴ」

何事もなかったような笑顔で、近くのアパートに越してきたこと、同じ高校に通うことになったことを伝えたのだ。

その時ケイゴは高校2年生。10年も前にいなくなってしまった友人の帰還は、ケイゴの人生を大きく動かすことになる。

「さむ……」

過去を回想して、頭もだいぶ冷えた。

無計画に飛び出して来たはいいものの、このままでは風邪をひいてしまう。すっかり短くなった陽はもうすぐ夕焼けになるうとしている。寒さもだんだんと増しているようだった。

今のこのこと帰ってしまっっては、癩にさわる。

プライドと健康のに板ばさみに立たされたケイゴは大きくため息をついた。吐き出された息は、雪のように白かった。

「こんなところにいたのか」

あの時と同じように、シヨウジは笑っていた。

公園の入り口からゆっくりとブランコのほうへ歩いてくる。

「……なんだよ」

ケイゴはぶっきらぼうに返事をする。

「拗ねてるのか？」

「べつに」

「言ったる、結婚するって」

放課後、シヨウジは簡潔にそう言った。初めは冗談だと思って聞き流していたケイゴも、どうやら本気らしいとわかると、すぐさま姉を問い詰めたのである。その結果、家を飛び出すことになった。

ケイゴはそっぽを向いた。

「なんだよ、そんなに怒るなって。黙っていたのは悪いと思うけどさ、リツコさんと交際しているなんて知ったらケイゴがどんな反応

するかわからなかったし……」

「怒ってるわけじゃない」

「だったら、どうして」

「わかんないんだよ」

ケイゴは思い切りよくブランコから飛び降りた。

「どうしてお前がそんな道ばかり選ぶのか。姉ちゃんと結婚すること、どんなメリットがある？ わざわざ学生結婚なんてする必要ないだろう？ 大学受験だってある。就職もしていない。それなのに、どうして！」

「もう、失うのは嫌だから」

どこか達観したような口調で、シヨウジがそつと呟いた。わずかに残った紅葉が散っていくように悲しげだが、言葉の奥に意志の強さがうかがえた。

「あの火事のあと、気付いたんだ。幸せは、得られるうちに掴んでおかなければいけないって。死なんてどこに転がっているかわからないからさ」

もし、車にひかれたら？

もし、病気になったら？

もし、火事ですべてを失うことになったら？

「18歳って法律で認められているぎりぎりの年齢だけど、不安はないよ。どん底の上には、幸福しかないんだから」

ケイゴは無言のままだった。

自分の浅はかな考えに腹を立て、笑っている友人を思い、名字の変わる姉のことを案じた。

つむじ風に巻き上げられるように、頭の中で感情が交錯する。

「それに、どうしてもやめられない理由があるんだ」

シヨウジの言葉を、ケイゴはもう聞いてはいなかった。

飛び出して来た時のような勢いで、家に戻っていく。

「……話は最後まで聞こうよ、お義弟さん」

まだ揺れているブランコに向かって、シヨウジはやれやれと漏ら

した。

「姉ちゃん、おれが悪かった！ ショウジの気持ちも考えてなくて自分勝手なことばかり言って……。もう反対しないから、あいつのことお義兄さんって呼ぶのも構わないから！」

両手を合わせて謝るケイゴを、リツコは静かに見守っていた。

「ごめん！」

「……あたしも、ケイゴに言わなくちゃいけないことがあるんだ」
実はね。

「あたし、赤ちゃんがいたりして」

「え？」

ケイゴは思わず素っ頓狂な声を上げる。

「……おれは、叔父さんになるのか？」

リツコは静かに首を振った。

「あんたとは、血がつながっていないんだけどね」

「……どういうこと？」

「今まで黙っていたけど……ケイゴはね」

養子なんだ。だから、義理の弟ってわけ。

(後書き)

ご拝読、ありがとうございます。
感想、ご批評ありましたら、どうぞ残していつてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4734i/>

秋風の真実

2010年10月8日15時02分発行